

人権尊重の企業づくり-その1-

多様な家族のカタチを
支援する企業での取り組み

(株)ウエディング石川

常務取締役 石川 于津子

— 目 次 —

はじめに～LGBTとの出会い～

儀間さんのこと

企業としての取り組み

終わりに～理解を深めながら前に～

□ はじめに～LGBTとの出会い～

皆さんこんにちは、株式会社ウエディング石川の5代目のおかみをしております、石川于津子と申します。よろしくお願いいたします。さて、私が今回お話することですが、企業の中で「LGBT」に関する研修を長崎県の中で弊社が初めて行ったということで、皆さんに弊社なりに伝えていけることがあるのではないかとこの講演を受けさせていただきました。どうぞ、よろしくお願いいたします。

株式会社ウエディング石川は、創業から数えまして今年で134年目になります。そのウエディング石川の前身が長崎県の旅館登録第一号店になります。創業者である石川マキさんの思いも引き継ぎながらとにかく人のために、人にやさしく正直な心で皆さんのお手伝いになれることをやっていこうというモットーで商売を続けさせていただきました。そのような中でウエディング業界では2017年ごろからLGBTに関する講座が開かれることになります。弊社の社長が関東の方まで研修に行き、衝撃を受けて帰ってきました。それはどういう衝撃だったかというと、「これからのウエディング業界ではLGBTのことにに関して、パートナーシップも含めていろんな意味で支援をしていかないといけない。そこが皆さんにやさしい結婚式を作り上げていく基本になっていく」という話を聞いてきたのです。社長はその足で翌朝、南島原市役所に出向き「パートナーシップ協定を結べるようにしてほしい」と直談判をし

す。保守的な街でまだまだ女性の地位向上が課題になっているようなところで、いきなりいかつい顔をした社長が来てパートナーシップの話をするなんて思ってもみなかったのでしょう。その時は門前払いをされて肩を落として帰ってきたことを覚えています。

□ 儀間さんのこと

そのあと、時を同じくしてある所から話を聞くことができました。それは株式会社ウエディング石川でウエディングのアルバイトをしていた女性が、LGBTに関する講演会の中でうちの名前を出して話をしているということでした。「どういうことだろう、名前は？」と聞いたら、『儀間由里香さん』ということでした。今、長崎県でLGBTの講演などをやっているTake it!虹の儀間ちゃんです。そして彼女のことをいろいろ調べてみました。すると、『ながさき・愛の映画祭』というのをちょうど主宰するところでしたので、弊社の社長と私の方で出向いて、その時彼女がどういう思いでうちで働いていたのかということを知りたいと思いました。そのあと、彼女から聞けば聞くほど、「ああ、そうだったのか」という疑問が晴れていく場面がたくさんありました。会社に戻って実はこうだったらいいよという話をしました。その当時、彼女は業務中なんですけどとにかく泣いていたんです。ウエディングの会場ですので必ず感動でみんな涙は流すので、彼女の泣き方もそのひとつだと思っていましたが違っていました。「私たちはこういうふうみんなに祝福された結婚式、披露宴はできないんだ」と思って涙がとめどなくあふれてきたと言うのです。私たちは全く理解していませんでした。それぞれの感動の涙の中にそういう思いもあったんだということでものすごく胸に突き刺さりました。そのあと、世の中でどんどんLGBTに関わる話が出てきました。

私には男の子2人、女の子2人の4人子どもたちがいます。食卓の中での話題にLGBTに関する話題がでてきます。男女平等とか、そういう話もさせてもらいます。なぜそんな話が出てきたかということ、子どもたちの周りにたくさんのそういう思いを抱えている子たちがいたということで彼女らはカミングアウトされていました。それも含めて、もっと身近なことではないかと私たちも思いました。そこでまずわれわれがやらないといけないことは、儀間ちゃんはその時に抱いていた気持ちを社員全体で理解することではないかと思いました。それだけ一本で突っ走りましたので、長崎県で初めてのLGBTに関する研修だとかは全く関係なく突き進んでいました。その時に社員全員で受けた研修では、こういった社員の名前が入っている修了証書という認定書が渡されます。LGBTマナー研修修了証書になります。様々な話を聞くうちにだんだん儀間ちゃんが抱えていた心の悩みに関して理解が深まっていきました。

□ 企業としての取り組み

その中で企業として何をすればいいのか。もちろんウエディングですので、ウエディングしたいと思って来られるカップルに関する理解はもちろんですし、または弊社に就職を望んでいる人に対して受け皿になることがわれわれの役目ではないかと思いました。その中で、講演会の中でも話が出ていた『レインボーフラッグ』をさりげなく置いてはどうかというご意見をいただき、弊社のフロントのどの角度からでも見えるような所に置かせてもらっています。あくまでもさりげなくです。そして、これは最初に弊社に来館されたときにカップルに書いてもらうアンケートですが、これには性別の記載はございません。普通、新郎・新婦と書くのですが、あえてそれは外しています。なので、一番に書かれるのが、

女性の場合もありますし、男性の場合もあり、そこは本人様たちにお任せします。われわれはそこに書く欄を限定することに違和感があるんじゃないかと考えました。そして婚礼の申込書も変えました。契約書になるものですが、ここでみなさんからよく尋ねられるんですが、「本人の欄には性別は書いていませんが、父母とありますよね」と聞かれます。いろんな人権の話があると思いますが、ご両親という書き方をしたときに悩まれる方たちもいらっしゃいます。お母様だけ、お父様だけという形もありますし、いろんなケースバイケースがあるんです。今のところは父母と書かせてもらっています。考えれば考えるほど、皆さんに理解してもらうものを私たちが作っていくのは企業として難しいなと思う側面にぶつかります。

この2年間はコロナ禍でウエディングが滞ってしまっています。その時にいろんなパターンでいろんな方たちが、いろんな心の悩みを持ちながらいらっしゃるかもしれない。出向くことすらできない状態で悶々としているんじゃないかと、いろんなことを考えました。このコロナ禍で一番考えたのが、いろんなパターンの人権のことです。もちろんセクハラもですけど、企業はセクシャルハラスメントに関するものは本当に強く求められていますのでまずやります。ウエディング業界の中でもLGBTに関する研修がほぼ行われていないのが現状です。ただ、それがコロナ禍でまたストップされて、社員の中でそれを理解する力が奪われてしまっているんじゃないかと強く懸念しています。そこがうまく進んでいくと、いろんな企業の方たちに波及効果もあるでしょうから、まずウエディング業界から始めていくというのが一番王道なんじゃないかなとわれわれは思っています。

□ 終わりに～理解を深めながら前に～

今マスクの問題が子どもたちの中ではありますが、マスクの話と学校の中でのスカートの問題は結構似たところがあります。高校生の娘がおりますが、マスクをしたくないという友達がいる。それは息が出来ない、息をするときつくなる、授業すら受けにくくなるということを訴える子もいます。スカートをはくことが嫌だという子ども達もいます。スカートをはくということに対して、今県内の高校でもいろんな高校がスラックスを認めるようになりました。近くの高校ですが、女性というふうに見なされて入学した皆さんが、スラックスを選ぶ人が多くなってきたという話も聞きました。その話を聞いて子どもたちの方がすんなり受け入れています。その子どもたちがもう社会に出てくる年齢になってきました。人権の講演会などが進んでまいりまして、儀間由里香さんが県内いろんなところに講演活動に出かけていますので、子どもたちはその部分に関する話を十分に聞く機会も多くなってきていると思います。そして先生方もよく理解してくださっている方々が多くなってきているように思います。子どもたちの方が受け入れ側の会社よりは知識として知っているんです。私たちのバブル世代を生きた人間が管理職になっています。その管理職の人間が一番頭が固いような気がします。われわれの世代です。そこがもっと柔軟に対応していくことで次の時代を作っていくことになるんじゃないかと思っています。どんどん目からうろこの情報がたくさんあります。今、いろんなところで講演をやってくださる所もあり、そういう機会もあろうかと思っていますのでぜひご活用いただければと思っています。われわれが理解を深めながらまずもって進めていく、そしてそれが波及してみんなが温かい中に包まれた状態で新郎新婦様、結婚するカップル、以外の社員を受け入れる側としてそれが波及していくことを願っています。